

Refereed Conference paper

地域密着型ボランティア活動支援システム の開発と運用 ～若年層のボランティアに関する意識向上～

高岡詠子[†], 小泉智美[‡], 高橋和寛[‡]

管理者とボランティアの間のスムーズなコミュニケーションの実現および若年層にボランティア活動を広めたいという地域の社会福祉協議会の要望を受け、地域密着型ボランティア活動支援システムの開発を平成 16 年度から行った。この概要を述べるとともに、若年層のボランティアへの意識向上のためにこのようなシステムを利用することができること、そして若年層にボランティア活動を広め登録者数を増やしたことが、および若年層が本システムを使用した後のアンケート結果について述べ、今後このようなシステムを運用する上で重要と思われるポイントについて述べる。

Development of Communication System Supporting Welfare Volunteer for Local Community

～Towards raising young people's awareness of
volunteer activities～

Eiko Takaoka[†], Tomomi Koizumi[‡]
and Kazuhiro Takahashi[‡]

We have developed an online local community system for volunteer information providing since 2004. Using our system, people are able to find out what kind of event and how to volunteer at the event and register from their mobile phone or computer easily. Administrator also uploads new information about event or for recruiting volunteers. In this paper, we report that this kind of system is useful for raising young people's awareness of volunteer activities, the number of users increased and the result of the questionnaire as well as the system overview.

1. はじめに

従来の千歳市社会福祉協議会でのボランティア募集は、広報誌に活動内容を掲載し、ユーザと管理者とのやり取りは郵送で行っていたため、非常に時間がかかっていた。また協議会では、以前から、若年層にボランティア活動を広めたいという希望があった。これらの問題を解消するために、我々は平成 16 年度から携帯電話用ボランティア活動支援システム MPC-VIP (Mobile-Phone e-Communication system for Volunteer Information Providing) の開発を行ってきた。若年層が必ずといってよいほど持っている携帯電話を用いて簡単にかつリアルタイムで最新のボランティア情報を閲覧することができ、ユーザと管理者との双方向のコミュニケーションを可能にした Web アプリケーションシステムである。平成 18 年度には、対応していなかったパソコン用システムの構築を行った。平成 19 年 6 月に

<http://pegusus.hello-chitose.jp/community/guests/>にて本運用を開始し、以来毎年改善を重ねながら運用し続けている。現段階では、管理者とボランティアの間のスムーズなコミュニケーションの実現という開発当初の目的の一つはほぼ達成されている。しかし、利用者数が少なく、若年層にボランティア活動を広めたいという目的は達成されていない。本稿では、開発したシステムの概要を述べるとともに平成 19 年度まではシステム開発が中心であった本システムの運用に目を向け、若年層のボランティアへの意識向上のためにこのようなシステムを利用することができるかを検証するということを第 1 の目的、そして若年層にボランティア活動を広め登録者数を増やすことを第 2 の目的として行った運用とその結果、および若年層が本システムを使用した後のアンケート結果について述べ、今後このようなシステムを運用する上で重要と思われるポイントについて述べる。

2. MPC-VIP の概要

本システムはパソコン上での管理者用インターフェースと、パソコンおよび携帯電話上でのユーザ用インターフェースを提供している。管理者側はインターネットに繋がっているパソコンから、ボランティア情報を簡単に公開することが出来るほか、登録者情報、ボランティアのイベント情報の管理や登録者へ一括あるいは選別してメール送信をすることも可能である。登録者側は、パソコンおよび携帯電話からボランティアのイベント情報を参照でき、その場で参照したイベントにエントリーすることができる。以下に図を交えながら詳細を示す。図 1 は MPC-VIP のシステム概要を示し

*[†] 上智大学 理工学部 情報理工学科 Department of information and communication sciences, Faculty of science and technology, Sophia University.

[‡] 千歳市社会福祉協議会 Chitose City Council of Social Welfare

たものである。開発環境は PHP+PostgreSQL である。提供している機能はすべて、千歳市社会福祉協会との何度にもわたるディスカッションおよび改善を繰り返して設計を行ったものである。次節以降、管理者側インターフェースとユーザ側インターフェースに分けて説明する。



図 1 システム概要図

2.1 管理者用インターフェース

管理者側に特徴の一つとしてユーザ管理の画面を図 2 に示しながら説明する。ユーザが新規登録を行うときに業種に対する興味のレベルを入力すると管理者側画面ではレーダーチャートで各ユーザがどの業種に興味を持っているかを確認することができる。また、レーダーチャートの色が赤の場合は一週間以上ログインしていない、緑は 1 週間以内にログインしている、青は 3 日以内にログインしているとわかるようになっていく。これは登録しておいてもほとんどシステムを利用していないユーザを把握することができる。①をクリックするとそのユーザにメールを送ることが可能であるが、別画面②のユーザリストをクリックしてユーザを複数指定してメールを送ることも可能である。その他、管理者側の機能として主なものは以下の通りである。

- イベント管理：イベント検索、新規登録、編集、削除、各種ソート、画像を扱うことが可能。エントリーしたユーザの情報を閲覧できる。イベントを新規で登録すると自動的に登録ユーザにメールで情報を配信できる。配信のタイミングは指定可能（予約もできる、即配信もできる）

- 掲示板管理：一般的な掲示板の機能を提供（スレッドごと表示はできない）
- お知らせ管理：ユーザのログイン画面に表示するお知らせの追加、編集、検索、削除、各種ソート
- ボラ管理：ボランティアコラムの略。ユーザにボランティアを知ってもらう目的で、ボランティアに関する豆知識などを定期的に掲載する。
- CIST ボラ管理：学内のペットボトルキャップ、リングブルの回収状況等、科技大内でのボランティア活動に限った情報を掲載する。
- ログアウト、アクセス解析

図 2 ユーザ管理プロフィール画面

2.2 ユーザ用インターフェース

ユーザ用のインターフェースでは携帯電話、パソコンのどちらでも以下のようなことができる。

- 新たなボランティア情報が管理者によって追加されると登録したメールアドレスに情報が送られてくる。
- イベントへのエントリー、一度エントリーしたイベントのキャンセル。

- ユーザ登録をしていない人でも、ボランティア情報の閲覧が可能。
- ボランティア情報を閲覧した後でも、ユーザ登録が可能。
- 掲示板を使つてのディスカッション

ユーザ登録のとき、連絡方法のうち、電話、FAX、メールを選ぶことができる。これは、高齢者などメールより電話連絡のほうが良いというボランティアも存在するからである。メールアドレスを登録しておく、管理者がボランティアの募集情報を入力すると、自動的にそれらの情報がメールで送られてくる。パソコンでも携帯電話でもどちらでも可能である。メール内部に書かれている URL へのリンクをクリックすると図 3.4 に示すとおり携帯電話、パソコンのいずれの画面でもイベント情報を見ることが出来る。イベント内容や仕事内容を見て、興味を持ってエントリーしたい場合は、「エントリー」をクリックする。エントリーすると図 5 に示すように自分のユーザ名が表示される。この画面上でキャンセルすることが可能である。

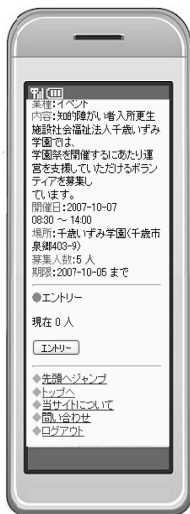


図 3 携帯電話でイベント情報を見る



図 4 パソコンでイベント情報を見る

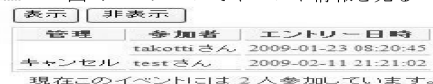


図 5 キャンセル画面

3. 運用における問題点と解決法：若年層への広まり

3.1 運用と広報

平成 16 年に開発をはじめた MPC-VIP は、17 年 7 月に大学のサーバを公開し、試験的に運用を開始した。この段階まではユーザのインターフェースは携帯電話だけであったが、ユーザからパソコンでの操作を行いたいという要求が出たため、対応していなかったパソコン用システムの構築を行い、18 年 11 月に千歳市社会福祉協議会側にサーバを移行した。最終的に本運用を開始したのが 19 年 6 月である。この間、17 年 7 月、19 年 10 月、20 年 10 月の 3 回にわたり、地元の新報（北海道新聞、千歳民報）に記事を載せて広報活動を行った。市民を対象としたシステム説明会も、19 年 10 月と 20 年 10 月に行った。しかし、本システムの利用者数は平成 19 年度においてわずか 15 名であった。現段階では、管理者とボランティアの間のスムーズなコミュニケーションの実現という開発当初の目的の一つはほぼ達成されているが、利用者数が少なく若年層にボランティア活動を広めたいというもう一つの目的は達成されていない。

3.2 若者の意識調査

一般的にもボランティアに参加しているのは高年層が多い[1]が、高年層のほとんどはコンピュータ機器をあまり使用せず、千歳市でもボランティア活動支援システムよりも広報誌などを利用してボランティアの情報を得ている。19 年度における本システムの利用者 15 名の中にも若年層は含まれていない。開発当初の目的の一つである「若年層へボランティア活動を広める」第一歩として、若者のボランティアへの意識向上をはかることにした。手始めに若年層がボランティアに対してどのように考えをもっているかを知るために、千歳科学技術大学（以下科技大）の学生 333 名を対象とし、平成 20 年 5~6 月にかけて意識調査を行った。質問の内容と主な結果を以下に述べる。

1. 大学入学以前にボランティア活動をしたことがあるか ⇒ Yes 29%
2. 大学時代にボランティア活動に参加をしたいか ⇒ Yes 25% 全国の 18~24 歳を対象とした世界青年意識調査[2]における、これらの二つの質問と同種の質問での結果 35%、43%と比べて低いという結果が得られた。
3. 参加したい人に対し
 - (ア) どのような理由で参加をしたいのか
⇒ 「地域や人の為に役に立ちたい(15%)」、「もの見方や考え方を広めたい(4%)」、「自分を成長させたい(13%)」、「授業で学べないことを学びたい(11%)」など、参加したい人は地域に貢献をしながら学校では学べないような事をボランティアを通して学んでみたいと考えていると思われる。
 - (イ) どのような日程で行いたいのか ⇒ 長期休暇中 35%、休日 37%、平日 28%
どれくらいの頻度で行いたいのか
⇒ 月に 1~2 回 19%、2 ヶ月に 1 回 14%、週 1 回 50%

4. 参加したくない人に対しどの様な理由で参加したくないのか
⇒ 時間が無い, 関心がないという理由が 50%以上を占める.
5. ボランティア活動をするならどのような活動に関心があるか
⇒ イベント関係の仕事 36%, 児童に関する仕事 26%, 事務系の仕事 18%, 高齢者と接する仕事 8%, 障害者と接する仕事 5%
6. ボランティア活動をするにあたりどのような心配事があるか⇒結果を図 6 に示す.
これを見ると, 自分にできるか, 相手にけがをさせてしまわないか, 相手とうまく接することができるかという心配が 3 割を占め, 5 で高齢者や障害者と接する仕事に興味が高い一因となっているのではないと思われる.

3.3 若年層の意識向上のために行ったこと

3.3.1 ペットボトルキャップとリングブルの回収

3.2 の結果より, ボランティアに興味のある学生が全国平均に比べ少ないとはいえず 25%おり, 地域貢献をしながら自分を成長させたい学生がいること, ボランティアに時間を使いたくない学生が多いこと, 心配事に, 自分自身に対する自信のなさや何をしたらよいかわからないということが多かったことをうけて, 「時間を使わない簡単なボランティア」に接してもらうことでまずは興味を持ってもらうことにし, 科技大で「ペットボトルキャップとリングブルの回収」のボランティアを平成 20 年 6 月から始めた. 回収ボックスを 40 個の各研究室に 1 個ずつ置き, 集まったペットボトルキャップとリングブルは 1 か月毎に有志の学生が回収した. その回収結果は, ボランティア活動支援システムのボラム(ボランティア コラムの略称)の CIST ボラムの中に掲載さ

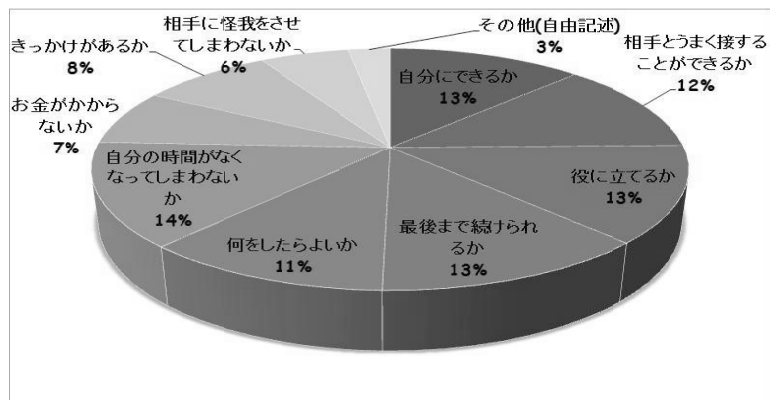


図 6 ボランティア活動をするにあたりどのような心配事があるか

れた. 平成 21 年 6 月から 12 月までのペットボトルキャップとリングブルの回収結果を表 1 に示す(単位 g).

表 1 ペットボトルキャップとリングブルの回収量

	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
ペットボトルキャップ	11500	5380	4100	7000	6730	8200	6300
リングブル	1800	290	400	400	680	960	940

表 1 において 6 月の回収量が他の月に比べて非常に多いのは, ゴミ集積所から外されずに捨てられていたペットボトルキャップとリングブルを有志が回収したことが含まれる. 8 月は夏季休業があったため回収量は少なめである. 9 月は大学祭があったためペットボトルキャップの量が多かった. それ以外の 7 月と 10-11 月は特別な行事がなかったが, ペットボトルキャップとリングブルともに段々と回収量が増えている. 12 月は冬期休業に入ったとはいえまずまずの回収量である. 月日が経過するにつれて回収に積極的に協力するようになった人が増えたのではないかと考えられる.

3.3.2 講義でボランティア活動支援システムの掲示板を使用

学生同士でボランティアに対して議論してもらうことで他の学生が自分と同じ考えを持っていること, または違う考えを持っていることを知ってもらい, ボランティアに対して興味を持ってもらえるように講義で本システムの掲示板を利用した. 科技大 1 年生の選択必修の筆者担当授業「インフォマティクス基礎」の 15 回の授業の中で, 実際の「情報システム」に触れる目的で本システムを 3 回の授業内で使用した. そして 3 回目の授業で本システムの掲示板を使い「ボランティアに対してどう考えるか」という内容でディスカッションをしてもらった. 付録に掲示板の内容の抜粋を載せる. 講義の時間を利用して掲示板を使っている興味のない学生はボランティアと講義に関係ない発言が多かったが, 真面目に議論している学生もいた. すでにボランティアに参加をしている, あるいは興味を持ち自分が何をできるかを考えている学生は好意的意見を出した. また, 否定的な意見を出す学生でもボランティアについて少しでも考えていることがわかった. 最初は否定的な意見を出していた学生が肯定的な意見の学生の発言を見て考えを変えたり, それらのディスカッションを見ている学生が肯定的な意見を述べたりなど, ディスカッションは非常に有意義に行われた. 特に「ボランティアは偽善だ」という意見に対して「少しでもやることで人のためになっているのだから」「自分が何かやったことで人に喜んでもらえるのはうれしい」「やらない善よりやる偽善」といった意見も出された. また, 「ペットボトルキャップやリングブルの回収に協力する」ことや「献血がボランティアになるとは知らなかった」という意見も多くあり 3.3.1 節で述べたペットボトルとリングブルの回収の取組と合わ

せて若年層のボランティア活動に対する考え方を広げることができたと思われる。

3.4 意識向上のための取組後の様子

3.4.1 ボランティアに対する意識の変化

ペットボトルキャップやリングブルの回収を大学内で始めたこと、および講義の中でのシステムの体験、ディスカッションをしたことを通し、ボランティアに対して意識の変化があったかを調べるために、講義でのディスカッション後の11月に科技大の1年生116名に2度目の意識調査を行った。その結果、ボランティアに興味を持ったという割合が42%となり、1度目の調査での「ボランティア活動に参加したい」という割合31%(1年生のみ)と比べると増加した。興味を持った理由として「本学で行っていたペットボトルキャップとリングブルの回収のような簡単に行えるボランティアがあるという事を知って興味がわいた」と意見があったことから、学内でのペットボトルキャップおよびリングブルの回収活動や授業内での掲示板でのディスカッションによって科技大の学生のボランティアに対する意識は向上したのではないかと考えられる。また、講義の最後でボランティア活動に参加したい人と呼び掛けた結果、28名の学生が強制ではなく自分の意志で本システムに登録をした。

3.4.2 システムに対する感觸

若年層の利用者数の増加に向けて、本システムを使うとしたらパソコンと携帯電話のどちらを使うかと調査したところ71%がパソコンと回答した。「携帯電話はお金がかかってしまうので何度も使いづらい」、「パソコンの方がディスプレイが大きいので見やすい」、「携帯電話は文字が打ちづらい」という意見が多くを占めた。本システム開発の目的の1つに携帯電話という若者に身近なインターフェースを利用することで若年層にボランティアを広めようという狙いがあったが、このようなシステムを利用するにあたって『パソコンの方が使われる』という結果が得られたことは、今後の本システムのあり方を考える上で非常に大きな収穫であった。

4. 関連研究

ボランティア活動を支援するサイトやシステム、および若年層のボランティア活動についての関連研究について本研究との比較を行う。3),4)で述べられているサイトは本研究におけるシステムと非常に近く、本システムと同様、管理者側からの情報を掲載し、登録ユーザはそのサイトから参加申し込みを行うことができる。運用もうまく行われているようである。4)では、今後広域的な情報連携が必要であり、このようなサイトの運営には地域に密着した情報に精通しているコーディネータを新たに育成し、そのコーディネータを通じて市民の間にコミュニケーションを重視する必要があると述べている。本研究におけるシステム運用上にも参考になる文献である。5)では要介護者/要援助者から管理者に何らかの援助依頼があったときに、オンデマンドで管理

者がその場でメールを作成し送信すると自動音声でボランティアに順次電話をかけ、承諾の可否を問い合わせるスタッフ手配支援システムを実現、またボランティア活動を登録/掲示する情報登録システム、情報をマルチキャスト配信する機能を備えたシステムを試験運用したことを報告している。今回の我々の研究は、システムの開発そのものを目的としているわけではなく、若年層へのボランティアへの意識向上のためにこのようなシステムを利用することができるかということを目的としており、他にはこのような研究は見られない。また、6),7)のサイト上ではボランティアを募集したい人、参加したい人との間のコミュニケーションをサポートしており、参加希望者はそれぞれ募集者に個別にメールや電話で連絡する形となっている。これに対し、本システムは、ある決まった管理者側からのボランティア情報をユーザに発信し、登録ユーザは本システム上で参加表明を行うことによって、管理者側が各ボランティアイベントに参加登録している状況(人数や氏名、連絡先)などを本システム上で確認できるという点が大きく異なる。8)は大学内でのボランティア活動支援システムの例である。初中等教育機関での教育補助ボランティアへの要請が多いことをうけて構築された、Web上で依頼を受け付けるシステムである。現段階では教育機関や公共機関からの依頼のみを受け付けることとしており、電子メールを用いて登録された学生に依頼内容を迅速に周知し、その後の具体的な交渉は依頼者と学生に委ねているようである。学生をターゲットとしてシステムであり、本研究の参考になるが、ユーザ側に提供されているインターフェース機能が本研究に比べると少ない。

文献9)では社会には自分の身近な生活とはまったく異なる世界が存在することを意識し、また、その社会と自らのつながりを感じることによって、その社会に参加するということを心理学的に分析している。さらに本稿で用いたアンケートは文献10)で扱っていたアンケートを参考にした。この文献では大学の在校生1年生~4年生の600名ほど(複数の学部生対象)にボランティア体験の有無やボランティア活動に対する意識についてアンケートを行っており、アンケートの分析を行った結果、何らかの「つながり」を持たなくても、授業時に配布されるチラシを通して、ボランティアセンターについての活動やプログラムを知り、思い切って学内のボランティアセンター訪れてみたという学生もいたという。学生たちに対しては、はじめてボランティアセンターを訪れるきっかけづくりが必要であることが改めて確認されると同時に、プログラムを企画立案し、チラシを配るという地道な広報活動もやはり重要であることが明らかになったという。何らかの形で呼びかけを行うことが重要であるという視点は、本稿で得られた結果と同じであり、今後のシステム運用において重要な要素となる。

5. 結論と展望

本研究の第1目的は、若年層のボランティアへの意識向上のためにこのようなシス

テムを利用することができるかを検証することであった。ペットボトルキャップとリングブルの回収を行いその結果をシステム上の本学の学生用である「CIST ボラム」に掲載することに加え、授業で本システムの掲示板を使ってボランティアに関してディスカッションをしたことで、学生がボランティアの中には簡単なボランティアもあることを知り、意識が高まったものと思われる。事実 2 度目の意識調査ではボランティアに興味があるという割合が 42 % という値になり全国平均に近い値となった。また、徐々にペットボトルキャップとリングブルの回収量が多くなってきたことから、ボランティアに対する意識は高まったと考えられる。また、講義でボランティア活動に参加したい人と呼び掛けた結果、28 名の学生が強制ではなく自分の意志で本システムに登録をした。したがって、授業等でこのようなシステムを効果的に利用して若年層のボランティアへの意識向上に役立てることができるといえるだろう。さらに、若年層にボランティア活動を広め登録者数を増やすという第 2 の目的のうち、若年層へボランティアを広めることは達成されたといえる。また平成 20 年 10 月 7 日にシステムの利用講習会を行い、新たに 12 人の高年層の方が登録をした。これらのことから、登録者数は平成 19 年度と合わせ 55 人となった。徐々に利用者の数も増えてきており、本研究の第 2 の目的もある程度達成されつつあるといえるだろう。

今後の展望として、第 1 にシステムの在り方を検討することがあげられる。開発当初若者に身近な携帯電話で本システムを利用してもらうことで若年層の利用者獲得を狙ったが、実際にはパソコンの方が使われそうであることや、短い文でいかに必要な事を表現していくかなど、情報提示の手法も考えていく必要があると考えられる。第 2 に中高生に対して学校を訪問しての利用講習会、学生によるボランティアの組織の発足など若年層が能動的にボランティア活動を行えるような枠組みが提供できればよいと考えている。また、携帯電話のイベント情報に画像を入れてほしいという要求があるが、開発当初は画像を表示しており表示時間がかかるという苦情が出て現在は表示を行っていないという経緯がある。表示方法の効率化を行わずとも軽い処理で画像表示を行いたいと思っている。

謝辞 本研究は平成 20 年度財団法人 高橋産業経済研究財団より助成をいただき研究を行いました。また、本研究は筆者が千歳科学技術大学在勤中に千歳市社会福祉協議会と共同で行った研究です。この場を借りて、財団法人 高橋産業経済研究財団、千歳科学技術大学および千歳市社会福祉協議会に感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 岩崎寿子/野村佑佳. " 日米比較及び意識調査によるボランティア活動活性化に関する一考察". 金沢大学経済学部情報科学ゼミ.
http://iisemi.w3.kanazawa-u.ac.jp/iisemi_files/ronbun/12/12_iwasaki_nomura.pdf (アクセ

- ス日時2009/7/9).
- 2) 内閣府. " 第7回世界青年意識調査結果要速報". 青少年育成ホームページ. <http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth7/pdf/top.html>. (アクセス日時2009/7/9).
- 3) かりや市民ボランティア活動情報サイト <http://genki365.net/gnkk/customer/kariya/index.php> (アクセス日時 2009/7/9)
- 4) 田中利昌: インターネットによるボランティアマッチングシステムの活用事例～かりや市民ボランティア活動情報サイトの事例から～
(<http://www.wa.commufile.jp/~minpub/file/NPO2006kariyavolmatch.pdf>)(アクセス日時 2009/7/9)
- 5) 米谷隆雄, 荒尾五郎(N T T データ), 中林久美子, 能田益弘(海南町役場), 前野洋子, (影石公昭海南町社会福祉協議会), 太田 能, 毛利公美, 森井昌克, 樫田美雄(徳島大), "地域ボランティア福祉活動支援情報通信システムの運用 - 徳島県海南町福祉支援情報通信システムの開発・展開事業-", "信学技報, SP2002-111, pp.15--20, Oct. 2002.
- 6) こうちボランティア・NPO 情報システム <https://www.pippikochi.or.jp/>(アクセス日時 2009/7/9)
- 7) 知多市ボランティア活動支援サイト <http://genki365.net/gnkc01/pub/index.php>(アクセス日時 2009/7/9)
- 8) アニュアル・レポート, 電気通信大学地域貢献部門
http://www.dcc.uec.ac.jp/annual/H18/2006_3.html(アクセス日時 2009/7/9)
- 9) 稲増一憲・志村誠・大高瑞都・池田謙一, "水平的ネットワーク多様性が若年層の社会参加にもたらす効果の検討", 日本社会心理学第 49 回大会 pp102-103 (2008)
- 10) 明治学院大学ボランティアセンター報告書 第3号 (2006)
<http://voluntee.meijigakuin.ac.jp/news/070427-houkoku3.html>(アクセス日時 2009/8/6)

付録 3.3.2 節の掲示板のディスカッション内容 (抜粋)

好意的な意見

- 手伝いだけではなく交流もあって勉強になった
- ボランティアを今もやっている
- 自然環境のボランティアをしてみたいと考える
- 困っている人に自分が何をすれば役に立つかを深く考える
- 自分の家でペットボトルキャップ集めている
- 参加したことが無いのでボランティアについて考えてみた方がいいと思った
- ボランティアには評価されるためにやるわけではない
- 献血は簡単なボランティアなのでみんなで参加して見るべきだ
- ボランティアをして得られるものは多くささやかでも誰かのためになっていると実感できる

否定的な意見

- ボランティアは偽善行為である
- 無理やりボランティアをさせられてやりたくなくなった
- ボランティアする前に自分のことで手いっぱいボランティアどころではない
- 学校とバイトがあるから無理だ
- ボランティアに参加するくらいなら友達と遊んでいる
- 忙しいから時間がない
- ゴミ拾いをしてもすぐに捨てられ徒労になるのは嫌悪感がある
- 時間を削ってまですることはない
- お金がもらえないので働く気にはなれない